
墮天使

並木沙知子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮天使

【Zコード】

Z5366F

【作者名】

並木沙知子

【あらすじ】

主人公の家に代々伝わる、もう古くてほこりをかぶった一冊の本。絵だけはきれいなその本を、主人公が開いて

地に墮ちた天使は、天界に何を願ったのだろうか…？

“人間になつて幸せに暮らしましたとさ。”

…違う。

違う違う違う…つ！

違うよ、そうじゃない。

だつてそう思わない？

何不自由もなく、疑問も持たず。

ただ無知なままに天界では生きてこられたのに。

それなのに、さ。

たつた一度嘘を吐いただけで墮とされた世界は地獄のようなもので。

“無知”でいられなくなつて。

すべてを知つて、絶望したとしても。

何をしたつて、神様は天界には昇らさせてくれぬまま、

…死んだのだから。

墮ちた小話 - 墮天使 -

古びた本。

それは分厚い表紙を持ち、ほこりをかぶつていた。

子供の頃、一度だけ持ち出して中身を覗いた私を蝕むもの。

…家宝、と呼ばれる物語。

ページをめぐると、かび臭さが鼻をさす。
顔を少しづかめながら話を読み出す。

その先にあるのは、何なのか。

そう思いながら、古びたきれいな絵を追つていく。

最初に描かれていた絵は、天使だつた。
綺麗な翼を持ち、穏やかに笑いながら雲の上を歩く。
そしてその先にいたのは、“神様”と称されるもの。
…大きな椅子に座つていた。

「これが、納め物です」

穏やかに笑う天使は、そういうて持つていた籠を差し出した。
中身は薬草だつただろうか。

そして、2・3ページ先で話は変わる。

泣き顔の天使。怒り狂う神様。

全てのものが壊されていて、そして悲惨な光景が頭にこびりついて。

そして。その天使は。

翼がもがれ、翼は銀になりました。

輝いていた金色の髪は、平凡な黒へ染まりました。

…零れた涙は、ダイアモンドになりました。

煤まみれで、ぼろぼろの服を着た“人間”になつた天使は、心優しいおじいさんに拾われ、幸せに暮らしました。

そう締めくくられた物語。

ふと、そんな本を見つけ出した私はページをめくつた。
しばらく気になりながらも本はなぜか手元にはなくて、探しても見つからなくて。

それが見つかった今、私は疑問を抱えながら本のページを捲り続けた。

（天使はどうして嘘をついたの？）

（神様はどうしてそんなに天使に怒ったの？）

（なんでそんなに天使は罰を受けなきやならなかつたの？）

最後のページ。

“幸せに暮らしました”

そう書いてある本に次のページがあるのに気がついた。

ページを捲る。ペラり、音が響く。

これじゃ、本当の物語。

「天使は、とても綺麗でした。他の天使の何倍も、何十倍も」

「生まれも他の天使とは若干違つていました」

「…神様の涙から、その天使は生まれた」

「そして、その天使は神様に寵愛されていました」

「その天使は、 “妃澪”（ひれい）という名すら持つていました」

「そしてある日…いつもどおり、神様は妃澪を待つていました」

「すると、いつも持つている籠を妃澪は持つてきませんでした」

「 “どうしたのだ？”と神様は尋ねました」

「 “今日は人間からの捧げものがなかつたのです”…そう、妃澪は
答えました」

「神様には、それが嘘だと知つていました」

「神様は確かに人間が物を捧げたことを知つていたからです」

「でも、妃澪は平然と嘘をつきとおした」

「…少し時間が経つて、神様はその理由を全て知りました」

「…神様は、激怒しました」

（神様の水晶に映つた妃澪が薬草を苦しむ人間を世話する人間にあ

げた姿)

“自分より他の人間を選んだ” そう言って、怒り狂つたのです

「ただの嫉妬でした。妃澪には、困りはてている人間を放置することなんてできなかつたのです」

「…が、妃澪は他に言い訳もせず罪を受け入れました」

当然、妃澪は極刑として天界から人間界へ墮とされました。その際、寵愛の証を全て失いました。

「人間界という慣れない秩序の中妃澪は生きていきます」

「ただ一つの選択を後悔しながら」

「永遠に消えはしない憎しみを心に刻みながら」

「そして、妃澪は見つけた」

「利用するに値する存在の人間を」

「それって、まさか『おじいさん』？」

「妃澪はそれを利用し、自分の…“人ではない血”を…この世界に遺した」

「そして妃澪は死んでいった」

「そして自分の悲劇を伝えるために」

「「」の本をつくり後の世代に託した」

「…まあ“遺した”と言つ方が正しいか

背筋が、ぞくつとした。

…嫌な感覺。

「「」の血が流れる人間の髪は…」

「透き通る黒い髪だらう」

「「」の血が流れる人間の目は…」

「…どこまでも人外の、深い金と銀の目だらう」

「左目に宿る金色は、神への憎しみだらう」

「右目に宿る銀色は、人への慈しみの心だらう」

私はつけていたコンタクトを外す。

コンタクトのせいで常に本当の景色なんて見たことの無い目。
それが外気に触れて。

持ち運んでいた鏡で顔を見る。

…初めて見た素顔。

左目は金色で。右目は銀色で。

お母さんに「コンタクトを外して鏡を見ちゃいけない」と言われた

から。

ずっと見たことの無かつた両田は、墮天使の烙印。この話の裏切りの証。この話がノンフィクションである証拠。

人ならざるもの、それは私。

お母さんもおばあちゃんも、みんな。

みーんな、私と同じ血の流れる人たちには。

：人ならざるもの。

皆と私が少し違つたのも。

人の事が何一つ理解できなかつたのも。

：それはみんな、わたしが…

（おじいさんは利用された）

（人ならざるものを使つてが産むために）

（おじいさんはそれを諭しんだ）

（天使は無事、子を産めた）

（だからギブ＆テイク、愛情なんて存在しなかつた）

（天使は神を憎んだ）

（死んでも尚、その憎しみは消えない）

(その血は脈々と憎悪を受け継ぎ、その誰かがソラに昇る)

(そしていつか神を殺すのだろう、滅ぼすのだろう)

(天使は喜んだ、天使はそのためなら命を惜しまなかつた)

(全てを壊しつくす)

(そう、心の中に誓つたから)

(天使が修羅になつた時、地上は破滅する)

ふわふわ

風に揺らされ髪がなびく。

その髪の色は輝く金色。

左耳には金色に響く憎悪を宿し。

右耳には銀色の慈しみを宿し。

背後には天使の羽の名残。

墮ちた天使は空を飛べない。

実際、羽なんぞもう一歩でしまって存在しない。

それに、名残だけじゃすぐおちてしまつ。

だから呼び寄せるしかない。

薬草を供える場所に赴く。

フードをかぶり、みすぼらしい布に身を包んで。

ひとり、天使が降りてきた。

「捧げ物ですか？」

妃澪と同じ、綺麗なつくり。

それはまだあたらしく、そして裏切りも知らぬ顔。

「……そつなんですけど、神様にお会いできませんか？切実な願いなんですよ！」

困ったように笑いながらその天使は考えるじぐさを見せた。

「……いいでしょ、お呼びします」

少なくとも妃澪が墮ちるまでは一度も無かつた天使の神様への裏切り。

それを私が実現したら、神は驚くのだろうか。

「そこ」の御仁、何の御用かな」

低い声が響く。

：変わらない、姿。

天使はどこかに引っ込んだ。

「貴方を殺しに」

上手く笑えたかな。

そう思いながらフードを取る。

神様は目を見開く、私は間合いをつめる。

あの物語の予言から推測するに、普通の武器でも殺そうと思えば殺せるらしい。

だから私はナイフで内蔵を思いつきり刺した。

鮮血が流れ出る

頭の中が真っ白になる

私は何をしてしまったんだ？

：自分で殺そうとナイフを突き出しておきながら私は動搖している

おまけに涙まで流れてくる

神様は崩れ落ちていく

あの物語の最後のページに書いてある天使の表情は何だったつけ。笑い顔だけ、泣き顔だけ、それとも怒り顔だけ。

顔だけ思い出せない。

でも、急に思い出してしまったものは不思議と気になってしまつ。

神様はため息をつくように息を浅く吐き出した。

それが最期だった。

ああそうだ、神様が死んでした天使の顔は、泣き顔でもなければ笑い顔でもなく、怒り顔でもなかつた。

ただ呆けたような表情で、棒のようになつ立つっていたんだ。

両目からは枯れたはずの涙は透明な色をして、目からちゃんと流れ出でいて。

時が止まつたかのようにほかのことは何も感じられなくて。壊れた人形のように倒れ付した。

そして神様を追うかのように田は閉じられ、全てが止まつて。

神様に創られたものは所詮神様という存在があるときしか生きてなんていけないものだから。

妃澪の血は途絶えた。

憎悪も嫌悪も全てが…何もかもが。

神様の死を嘆くかのように氾濫し、そして、世界の全てを壊していくつた。

全てが壊され、全てが無になつた頃。
私はやつと報われた。そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366f/>

墮天使

2010年10月28日08時42分発行